割礼を受ける少女たち

k o d o m o z u r u m u k e

この作品はR18描写を含むため、18歳未満の方は閲覧禁止です。

HinaProject Inc.

注意事項

このＰＤＦファイルは小説家になろうグループサイトで掲載中の作品をＰＤＦ化したものです。

このＰＤＦファイルおよび作品の取り扱いについては、小説家になろう利用規約が適用されます。そのため、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止いたします。作品の紹介や個人用途での印刷および保存にはご自由にお使いください。

【作品タイトル】
割礼を受ける少女たち

【Ｎコード】
Ｎ８２５５ＣＢ

【作者名】
ｋｏｄｏｍｏｚｕｒｕｍｕｋｅ

【あらすじ】
女性の性欲を抑え、マスターベーションを予防する策として、クリトリスの包皮にメスをいれて傷をつけるということが決められた。少女たちは小学校５年生・中学１年生・高校１年の３回、全員が包皮にメスを入れられることになった。その様子をエピローグと６章に分けて描きます。

エピローグ（前書き）

性器切除物語の新シリーズです。結構案が思いつきますが、ネタ切れ・使い回しになりつつもありますので、読者の皆様から色々コメント・御意見頂きたく、宜しくお願いします。斬新な発想によるネタの提案などもらえたら嬉しいです。そして、読者の方がどう評価して下さっているのかとても気になるので、是非コメントして下さい。

エピローグ

２０　年、少女たちに新たな試練が課せられることになった。益々多発する性犯罪を減らそうという取り組みの中で、女性が自らの身を守ることの大切さが謳われた。また性犯罪は男性による一方的なものではなく、それを誘発してしまう女性側にも問題があると結論づけられた。ある科学者の研究によれば、性欲は女性の方がはるかに強いらしい。望まない妊娠による中絶数の増加も問題となっており、女性が性に対して積極的になりすぎないことが大切ということだった。

まず、１８歳未満の性行為は法によって取り締まられた。そして性欲をかきたてるマスターベーションは慎まなければならないこととされ、家庭においては保護者が監視する必要性も明示された。ここで厄介なことは、女性には性感に特化した器官があるということだ。その代表ともいえるのがクリトリス。当初はクリトリスそのものを切除することが検討されたが、人権上の問題から猛反発が起り、実現までに至らなかった。その代案として考えられたのが、クリトリスの包皮に傷を付けるという方法だ。これは今でも、一部の地域で民族による伝統習慣として行われている。クリトリスを切除することや陰部封鎖に比べれば身体的な影響は極めて少ない。それにも関わらず、痛みを与えることによる効果が期待できた。処置への手間も少なくて済む。ある説によれば、クリトリスは刺激されればされるほど性感が増して成長するとのことだ。それを防止する効果があるとなっては、とんとん拍子に導入が決定した。

初潮を迎える時期の少女に施すのが適切ということになり、ひとまず第1回目の処置は初潮を迎える子が増えてくる小学5年生で行われることになった。その後、中学1年生と高校1年生の2回実施される。小学5年生の時は全員共通の施術だけだが、中学高校になるにつれ、希望があればオプション施術も可能となる。

小学5年生の少女たち（前篇）

その日、女子児童達は皆、うかない顔をしていた。何だって自分の健康な性器にメスを入れられなければならないのか。昨年受けた6年生の先輩から、相当痛いと聞いていた。できることなら逃げ出してしまいたい。しかしそんなことをしても、後でつかまって個別にされてしまうに違いない。どうせやられるなら同級生と一緒の方がまだ耐えられる。既に男子児童や他学年の子ども達は下校していて、校内にいるのは自分たちと先生、そして病院から派遣されてきた職員だけだ。女子児童はすでに体操着に着替えて待機していた。

処置は体育館で行われることになっていた。A組から順に、前半10人が呼ばれ教室を出て行った。処置は5人が同時に行われることになる。最初の5人が終わると3組目が呼ばれ、続いてB組・C組と行われる。この学校では女子が1クラスに約15人で3クラスなので、9回同じ作業が繰り返される。

最初の5人が処置の準備に入った。体育館の入り口側に設けられた仕切りの中に医師が一人、待機している。中に入るとすぐ、ズボンとパンツを脱ぐよう命じられる。覚悟を決めてすぐに従う子もいれば、なかなか行動に移せない子もいる。学内でも女帝と恐れられている女教師が早くするよう一喝している。それでもパンツを脱げない児童には、教師自らが手をかけて抜き取ってしまう。気丈な子、目に涙を浮かべる子、すでに泣き出してしまう子と色々いるが、淡々と作業は進んでいく。脱いだ服を手持ちの袋に入れ、ベッドの上に仰向けに寝る。医師は足を開かせて、少女たちの股間を確認する。

早い子は既に発毛しているので、それを剃り落としてしまう。ここでは股間を確認し、クリトリスが見えることを確かめるだけだから、数分で処置が終わる。ここから5つのブースにわかれ、本当の処置が始まる。

小学5年生の少女たち（後篇）

入り口の仕切りの中で一人一人、性器の確認をされた少女たちは、下半身裸の体に持参したバスタオルをまき、指定されたブースに向かう。いよいよここでは過酷な割礼が行われる。

仕切られた個別ブースの中には医師が一人、看護士が一人、助成の教諭が二人、待機している。できるだけ女性医師・女性教諭で構成されることになっているが、大抵医師が教諭の一人は男性になってしまう。思春期に入りかけている少女たちにとって、裸になる空間に異性がいるというだけでも心理的負担になる。

ブースに入ると体に巻き付けていたバスタオルを外し、脱いだ体操服の入った袋を籠の中にしまう。４人の大人に囲まれ、逃げ出すことも拒否することもできない少女たちはひたすら耐えている。ベッドにあがるとすぐ、二人の教諭に足を大きく広げられる。９０度以上の大きさに広げられ、無毛の股間が丸見えになる。看護士が股間をアルコール消毒すると、多くの少女ははじめて味わう性感がくすぐったく、体をよじる。消毒が終われば看護士は反対側に回り、少女の両手首をしっかり握り上半身を固定する。

体を3人の大人に固定され、身動きが出来なくなった少女の股間に、メスを右手にもった医師が近づく。クリトリスを覆っている包皮を確かめ、最適な場所を確認する。そして狙いを定めた場所へ、鋭利なメスをさっと入れる。あまりに強くメスを入れるとクリトリ

スそのものを傷つけてしまう。余計な傷をつけないためには、絶対に動かないことと適度な強さが求められる。包皮の形状も人それぞれである。一番厚くなっているところを狙い、数㎜程度の切り込みを入れる。

もちろん、皮だけであっても激痛が走る。ここまで涙ひとつ見せなかった少女であっても、メスが入った瞬間には叫び声をあげる。中には学校中に聞こえるような大声で泣き叫ぶ子もいる。切られた皮からふきだした血をすばやく止血してガーゼで押さえてしまう。細菌対策として消毒の塗り薬が傷口に塗り込まれるが、これがまたよくしみて再び叫び声があがる。ある程度血がとまれば、絆創膏のようなものをクリトリス周辺に一枚はり、これで処置は完了する。少女たちのパンツには予め生理用ナプキンを装着してくるよう保護者に説明がされているので、漏れる心配もない。

処置にかかる時間は5分もない。しかし傷口が小さいとはいえ、体の中でも敏感な場所にメスをいれられる少女にとってはたまったものではない。なぜこのような処置を受けなければいけないのか、わからない年頃だからなおさらだ。しかし親も教師も、これは良いことだと信じている。日本という国は立場ある人が強固に主張した意見にはなかなか反論がでないようである。

彼女たちは2年後と5年後にも同じ処置を受けなければならない。同じ処置だけで済めばまだ良い方である。もっと過酷な処置を受けさせられる少女もいる。

中学1年生の少女たち（前篇）

女子生徒のクリトリス包皮にメスを入れることが事実上義務化された。全国各地の中学校でも、入学したばかりの1年生を対象に処置が行われる。小学校の場合はほとんどが学校の体育館や多目的室を使って行われる。中学校の場合は学内で行う場合と学校単位で病院に移動する場合が半々である。

学校で行われる場合、小学生の場合は1つであった準備スペースが増やされる。中学校では準備スペース2：処置スペース4～5が標準となる。これは少女たちの発育により、剃毛が必要なケースが大半だからである。ほとんどの子はすでに発毛しており、準備スペースでパンツとジャージを脱いで袋に入れた後、ベッドの上に大股を開いて仰向けに横たわり、医師の手で陰毛を剃り落とされてしまう。羞恥心と恐怖心からこの時点で既に泣き出してしまう子も少なくない。すすり泣く少女の声がまるで聞こえないかのごとく、作業は淡々と進んでいく。

最初の2年間を除き、3年目からは小学5年生の時に一度体験した処置である。その時の痛みは忘れようがない。どんなに我慢強い子であっても、体内で最も敏感な場所にメスをいれられて平気なわけはない。お風呂などで自分の性器にある傷をみる度、あの日の激痛が蘇る。性器周辺は血流が良く、傷の治りは早い。そのため傷跡は残っていても、以前とほとんど変わらない性器を保つことができる。

学校で処置が行われる場合、肝心なのは押さえつけて暴れないようにすることである。小学生と違うことは、自らも体験した上級生が助成していることだ。生徒会役員を中心とした上級生は、自らの苦難を思い出しながら新入生をおさえつける。暴れでもしたら大ケガをするのは新入生である。心を鬼にして力をこめる上級生もいれば、心底喜びながら従事しているSな先輩もいる。それはスタッフの教諭たちも同じである。教師として表面上は生徒に接しながら、自分たちは体験することもなく済んだ苦痛の儀式を受ける生徒たちをみて本当は喜んでいる教諭も少なくないのだ。体格や暴れ具合にあわせ、3~5人でおさえつけながら処置は次々行われていく。万一にも逃げだそうとするような生徒がいれば、体育教諭が全力で捕まえ、屈強な男性教員がしっかり羽交い締めにした状態でメスが包皮を傷つける。

病院で行う場合は学校から専用の送迎バスがやってくる。簡易処置室で剃毛などを受けたあと、手術台にのせられて処置を受ける。両足と上半身は強力なベルトで固定されてしまい、動くことは決してない。看護士が一名、頭のあたりを固定し、首をふりすぎて痛めないよう留意するだけである。病院だけあって手際よく進んでいく。処置が終わればすぐにナプキン付きのパンツをはいて移動する。クリトリス本体を切るような荒療法ではないので、よほどのことがないかぎりはそのままバスに乗り込んで学校へ戻る。彼女たちが高校や専門学校に進学を希望する場合、齋貞でもあと1回はこの処置を受けなければならない。

しかし親の方針やマスターベーションへの懲罰行為として、もっと厳しい過酷な処置を科せられる少女も中にはいる。

中学1年生の少女たち（後篇）

クリトリス包皮に傷をつける処置は中学生になったばかりの少女全員が受ける。多くの少女たちは中学時代、その一度だけの処置を受ければ後は平穏に過ごすことができる。しかし一部の女子生徒は家庭の方針や懲罰として更に過酷なオプション処置を追加されてしまう。

中学生が受けることのできる、いや受けさせられる可能性があるオプション処置は2つある。1つ目はクリトリス包皮へのメス入れを継続的に行うこと。学校全体で行われる処置は無償であるが、希望すれば自費で追加することができる。2つ目はクリトリス本体に傷をつけてしまうというもの。保護者の依頼があれば、いずれかの処置をオプションとして追加することができる。躾の厳しい家で課される場合やマスターベーションを発見された懲罰として行われる場合が多い。

同じマンションに住む友紀子と真木子も継続的なクリトリス包皮へのメス入れを受けさせられている。きっかけは小学六年生の時、友紀子がマスターベーションをしているのを母に見つけられたことだった。ほんの出来心だった。風呂上がりに体が渇くまでの間、ようやく生えてきた陰毛を目にした友紀子が興味本位で性器に手をやった。何ともむずがゆい快感に自分が大人になっていくことを実感していた。ついうっとりとして母の足音に気がつかなかった。しかしそれを発見した母は激怒し、中学生になったら継続的に処置を受

けさせると通告した。話を聞いた真木子の母も、うちの娘もやっているかもしれないと考え、一緒に受けさせることを即座に決してしまった。真木子は本当に一度もマスターベーションをしたこともなければ性に対する関心もない。うかつに見つかってしまった友紀子に対する怒りもあるが友情が崩れないよう、平素を装っていた。巻き込んでしまったことをひたすら謝る友紀子を、同級生の真木子が逆に慰める。自分も過酷な処置をされるというのに、中学生女子の友情は素晴らしいものである。

施行規則により、処置から丸3ヶ月を空けなければいけないことになっていた。そのため中学1年生の4月に学校で受けて以来、夏休み・秋休みと1月下旬に二人は病院へ連れて行かれ、その都度メスを入れられた。傷口がふさがるのに約1ヶ月を要し、そのくらいの期間はマスターベーションをしたくても傷が痛んでしまい、とてもできない。傷がようやく癒えた頃、再び病院へと連れて行かれる。3ヶ月に1度、毛も剃られてしまうため、二人は中学生時代、同級生が当たり前にはやしている陰毛がまともに生えそろうことはない。常に薄い状態になる。傷の治りが早い部分とはいえ、処置から1週間近くは排尿さえしみて痛い。月経も比較的重い二人は常に下腹部の痛みを背負っているようなものである。

大変厳格な家庭に育っている奈那の両親は、中学に入ってすぐ、クリトリス本体にも傷をつける処置を娘に強要した。両親は本来なら、オプションの1と2を併用したいのだが、生徒保護のため、それは禁じられていた。致し方なくオプション2だけを選択した。こちらは1よりも回数制限が多く、年に1回までとなっていた。学校単位で病院に処置を受けに行った日、奈那は一番最初に処置を受け

た。同級生とは切開の部分が異なるからである。一番最初に名前を呼ばれ、みんなが注目する中、手術室へと入っていくのだけでも少女にとってはいじめに匹敵する苦痛であるが、それが考慮されることはない。

クリトリス包皮へのメスも勿論痛いが、本体にメスが入るのはその何倍もの痛みが襲ってくる。体の中で一番敏感なところにメスを突き立てられ、奈那は病院中に響くような声で泣き叫んだ。傷つけられたクリトリスからの出血が痛々しい。これを来年は、後輩達に混ざって学校から病院へ向かい、またもや最初に受けなければならない。何度も両親に泣いてすがったが、一切聞く耳はもたなかった。両親からすれば、娘を性から遠ざける良い習慣なのである。

高校1年生の少女たち（前篇）

義務教育は中学までで終わるといっても、ほとんどは高校や専門学校に進学することになる。中卒では今の時代、働ける場所も限られているからだ。男子は勿論、女子も大半が進学を選ぶ時代となった。高校1年生に相当する少女たちは、4月の健康診断にあわせ、人生3回目のクリトリス包皮切開を受けなければならない。中には中学時代、親からオプション施術を追加され、既に10回もメスを入れられているものやクリトリス本体にもメスを入れられてしまった可愛そうな子もいる。

暴れる高校生を押さえつけておくのは至難であり、危険性も高いことから、一部の中高一貫校を除き、高校生は病院にて施術を受ける。学校で行われる場合は女性では押さえきれないため、体育科の男性教師が一人は押さえつけに加わるケースが多い。それに女性教諭や上級生が加わり、がっちり固定される。病院ではベルトが体を固定するので暴れる心配はない。首を痛めないよう、頭を看護士に固定されるだけで事足りる。ひざを少し曲げた状態で大きく広げられ、がっちり固定される。

中学生までと同じようにまず最初に剃毛が行われる。高校生ともなればそれなりに生えそろっているので、処置ブースも多く設けられている。恥ずかしいから自分である程度処理してくる子もいるが、性器周辺に傷をつけてはいけないという理由で原則は禁じられているため、全てを剃ってくる勇気がある子は希にしかいない。それが見つかれば親や学校に通告され、オプションを受けさせられる可能

性も高くなってしまう。そもそもが、クリトリスや小陰唇周辺の毛は自分で剃ることが大変難しい。看護士は慣れた手つきで少女たちの性器をつるつるにする。

体を固定された後、医師が股間を消毒する。ここから少女たちの緊張は最高潮に達している。そして左手にもった器具でクリトリス包皮が固定され、一番肉の厚い部分を狙ってメスが入る。すぐに激痛が走り、同時に沢山の血が噴き出してくる。すぐによくしみる消毒と止血が行われ、傷口をテープでとめると処置は終わりだ。処置を受ける子が次々つかえているため、すぐベッドから下ろされてしまう。股間に痛みはあるが、自分の足で歩いてバスまで戻らなければならない。

少女たちは股間の痛みにたえながら、できるだけ患部が椅子にあたらないよう気をつけて座っている。普段は陽気におしゃべりをする少女たちも、この日ばかりはすすり泣くばかりである。高校生には中学までとは比較的内ほど過酷なオプションを受けさせられる子もいる。

高校1年生の少女たち（中篇）

小学5年生・中学1年生と過去2回、健康なクリトリス包皮にメスを入れられてきた少女たちにとって、普通ならば高校1年生春が最後の処置となる。今回我慢をすれば、もうこんな過酷な痛みを体験することはないはずだ。何度受けても痛みは軽減されないが、それでもこれが最後だと思えば耐え抜くことができる。しかし、一部の女子生徒たちは親の意向により、もっと過酷なオプションを課されてしまうのだ。反抗期の少女たちも何とか処置を免れようと親たちの機嫌をとり誠意をみせ学業に励む。しかしそれもむなしく、書類に保護者のサインと捺印をされてしまう少女もいる。

中学生を対象としたオプションは、クリトリス包皮へのメス入れを継続的に行うこと／クリトリス本体に傷をつけるの2つのみである。高校生の場合もこの2つを選ぶことができ、前者は高校卒業までに最大8回、追加することができる。後者は年に1回だけという決まりも中学生と同様だ。高校生だけに認められている過酷なオプション、それがアフリカなどで行われている女性器切除である。切除する部分は「クリトリス先端のみ」「クリトリス全体」「クリトリス先端＋小陰唇」「クリトリス全体＋小陰唇」「クリトリス全体＋小陰唇＋大陰唇の内側」から選ぶことができる。指定された病院だけが発行できる専用の申込用紙には切除を希望する部位に○をつける欄があった。更に希望すれば「大陰唇上部の縫合」を付け加えることもできる。

あまりにも過酷な処置であるから、事前に専門医によるカウンセ

リングと診断が行われる。医師にもよるが、家庭の躾というだけでは認められないケースもある。一度でも自慰行為を見つかってしまった場合、あるいは男性との交際経験など性の不純行為と認められる行動があれば、大抵の場合は認められる。どうしても処置を受けさせたい親が、医師を金銭で買収するようなこともあるようだ。「性への異常な関心が学業や日常生活に支障を与えていると考えられる」とでも書かれれば許可はおりてしまう。一応、処置を受ける本人の署名欄もある。自ら納得して署名する女子などほとんどいない。ここで署名を拒否できるくらいなら病院に来るはずないのである。たとえこの場で署名を拒んでも、家に帰れば更にひどい仕打ちが待っている。場合によっては親が自ら、性器切除を施さないとも限らない。この段階までに少女たちは何度も、親に懇願して許しを得ようとしているはずだ。何をしても、どうしても親が許してくれず、これ以上抵抗できない少女だけが集まってきているというのが実状である。

激しい痛みと出血をともなう処置であるから、建前上は麻酔の使用を勧められるが、麻酔を使用する例は半数以下である。ただの予防としてだけ考えている裕福な家庭であれば麻酔の使用もあるが、そもそもが自慰行為や男性交際の罰として施術を考えている家にとって、痛みを与えることは格好の罰となる。痛みがなければ罰したことにならないというのが親たちの言い分である。それに麻酔を使用すると、経費が非常に高くなる。経済的な理由で麻酔を選択せず、娘に我慢を強いる親たちも結構いる。

高校1年生の少女たち（後篇）

　ここは都内にあるごく普通の公立高校である。高校1年生は今日、2人の少女が欠席している。2人は病院で性器切除を受けさせられているのだ。

　小嶋佐紀子は中学2年生の時、ショーツに手をいれているところを母に発見されてしまった。すぐ父に告げ口をされ、大きな物差しで太股や股間を何度も叩かれる体罰を受けた。これで罰は終わりだと思っていたが、両親は高校生になったら性器切除を受けさせるつもりでいた。高校の入学式を終えた夜、両親は佐紀子に手術を通告した。佐紀子にとって不幸中の幸いは切除部分が「クリトリス先端＋小陰唇」でクリトリスの根元は残るので将来的に復元手術が可能であるということ、大陰唇の縫合は免れたことである。そして「罰は受け入れるから、高校では勉強を本気で頑張るから」と哀願した結果、しぶしぶであるが両親が麻酔の使用を認めてくれたことである。病院で剃毛と消毒をされ、クリトリスの根本付近に痛い麻酔の注射が突き刺さった時、佐紀子は大声をあげて泣き出した。どんなに泣いても手術が途中で止まることはない。担当の女医は真剣な表情で小陰唇の左半分を鉗子でつかみ、メスで組織を切り離した。出血はあるが痛みはない。続いて小陰唇の右半分も切除すると一度消毒を施した。そしてクリトリス包皮の中にピンセットを入れて先端の柔らかい部分を引っ張り出し、真ん中ほどで切除した。組織の途中で切られたので出血は多い。消毒をして全ての術式は終わる。痛みはないが、股間に何かをされている不快感と恐怖で佐紀子は泣き続けていた。本当の地獄は数時間後、麻酔の効果がきれたあとである。突き抜けるような痛みに苦しめられ、特に排尿のたびに必要に

なる消毒の瞬間は激痛である。これを父に押さえつけられながら母にされる度、恐怖と激痛と羞恥心で佐紀子は参ってしまうのだ。

岩田遥は中学卒業直後、高校受験でお世話になった塾の学生アルバイト講師と手をつないで歩いているところを、営業回り中の父に見つけられてしまった。しばし尾行した父は、二人が木陰でキスをするシーンを目撃した。当然のごとく母も激怒し、二人は即座に性器切除を決めた。そして高校入学直後、遥に先日男性と街中でキスをしていたのを見つけた、その罰として性器を切り落とすと通告した。万が一恋人といるところを見つかれば相当な罰を受けることは遥もわかっていた。だから家から離れた場所で、両親が確実に仕事をしている時間を見計らってデートをしていたのだ。それなのに営業回り中の父に見つかってしまうとはあまりに不運なことだった。思ってもいなかった性器切除を自分が近々受けさせられるとわかり、遥はパニックを起こした。両親の足下にすがって性器切除を免じてもらえるよう頼んだが、一切の情状酌量はなされない。「クリトリスの全体と小陰唇、大陰唇の内側を切除した上で大陰唇の外側同士を上部で縫い付ける」という最も過酷な施術を麻酔なしで受けさせられることになってしまった。

遥は手術当日、逃げ出してしまうつもりだった。しかし前夜、遥は自室ではなく両親の寝室に一緒に寝かされた。これではどうにも逃げられない。朝早く、逃亡を図ろうと思ったが、両親はしっかりと見張っていたので失敗した。前夜から飲食は禁じられているため、朝起きて風呂に入るとまもなく出発の時間である。お風呂の中で、遥は自分の性器を触ってみた。自慰の習慣はない遥ではあるが、快感を得る場所くらいは知っていた。そして洗い場に出ると、鏡を股

間に差し込み、本日限りとなる自らの性器を監察した。クリトリスも根こそぎ切り落とされてしまっては、完全な再生は難しいという。弱冠15才にして、体でもっとも快感を得られる場所とさよならしなければならない。風呂からあがった遥に、両親は手術同意書に署名をするように命じた。保証人の証明と、切除を受ける部位は既に書き込まれている。逆らえない遥は震える手で自分の名前を書き込んだ。

両親に引きずられるように病院へつくと、上半身だけを覆う手術着に着替えさせられ、剃毛と血液検査が行われた。すきあれば逃げ出したい、どんなことがあっても性器を切られるよりはマシだと思っていた遥だが、両親はその隙を与えなかったのだ。いよいよ手術台に押し倒された。まず、上半身を太いベルトでしっかり固定し、動けないようにした。切除の間は更に看護士が一人、馬乗りになって動けないよう固定する。そして足は大きく広げられるだけでなく、後転をする時のように上に持ち上げられ、M字開脚にした状態で固定される。こうすることにより仰向けの状態よりも性器が突き出される形になり、根元までの切除がしやすくなる。そして心電図がとりつけられ、口には窒息防止のチューブがいれられた。

消毒がされるとすぐ切除がはじまった。遥はやめてやめてと泣け叫ぶが、手術がとまることはない。時折「お母さん」「許して」「お願いします」などの叫び声も聞こえる。最初は左右の大陰唇の内側にメスをいれ、えぐり取る。よくしみる消毒の後、今度は小陰唇全体を左右共に切り離す。そして遂に最も敏感なクリトリスにメスが入っていく。最初に包皮を切り落とし、血まみれのクリトリスを完全に露出させる。それをピンセットで強く引っ張り、体内に埋まっていた根元の部分から、メスで切り落としていく。一度では全て

を切ることができず、消毒を織り交ぜつつ手術は続けられていく。遥は意識を失い口の中に沫を吹くが、吸引されるのでまた意識が蘇り激痛を感じる。クリトリスが切り終わると、大陰唇の外側同士を固い糸で縫い付ける。膣や尿道口の部分はしっかり確保し、もともとクリトリスがあった位置あたりをしっかりと縫い付けてしまう。更に尿道口の下も軽く縫って、大陰唇を一枚のフタにしてしまうのだ。

すべてが終わった時、遥は力つきていた。心臓は動いているが死んだも同然の姿である。もう泣くことさえ途中でやめていた。もちろん、途中で痛みになれたわけではない。泣く力さえなくなってしまっただけのことである。そしてこの痛みは、これで終わりというわけではない。当分、排尿の度に激痛が走り、しかもその後にこれまた激痛を覚える消毒を都度しなければならない。痛みがひいても二度と快感を味わうことはできない。

肉体的にも精神的にも、遥は性欲を完全に奪われていた。

高校1年生の少女たち（後篇）（後書き）

やっと完結です。評価やお気に入り数がやりがいでした。
感想・意見を宜しくお願いします。それが次作への意欲になります。
すでに構想はできています。意見を参考にアレンジしていきたいです。